



小川で起業 学生が探る

関学大10人 Iターン女性社長らの話聞く

関西学院大(兵庫県西宮市)の学生10人が27日、小川村の地域資源を掘り起こそうと、同村や長野市で事業を営むIターンの女性らに聞き取り調査をした。女性の起業・移住を支援する村の事業「おやき研究所」の一環。学生たちには調査で分かった魅力や課題をまとめて来年2月をめぐりに発表してもらい、起業や定住促進のヒントを探る。

村の移住支援事業の一環

同大人間福祉学部の学生たちが26日から2泊3日の日程で滞在。27日は3班に分かれ、農産物を扱う企業やパン店など

と10カ所ほどを訪ねた。村内で農産物の卸売りを手掛ける三水亜矢社長(53)「山口県出身には起業の経緯などを聞いた。三水さんは村の魅力として「人のつながりが強い」ことを挙げ、女性の起業には「家族の理解と協力が

「山間地の可能性 幅広い」

第二」と指摘。農産物のほか村内で採れる野草も引き合いがあると話した。

同大3年橋川美悠さん(20)は三水さんに「食用花の販売にも力を入れている」と聞き、村が移住してほしいと考えている若い女性に「響く素材」と感心した様子。「山間地のビジネスの可能性は幅が広いと感じた」と話していた。

「おやき研究所」は人口減少対策として本年度スタート。来年3月の同名組織の本格始動を前に、起業やまちづくりを研究する同大の学生に調査を依頼した。